

「カラヤン フィルム・コンサート ワーグナー：歌劇《ラインの黄金》」

★★★★

2009（平成21）年1月7日鑑賞<テアトル梅田>

演出・指揮：ヘルベルト・フォン・カラヤン
ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
フライア（フリッカの妹、美の女神）／ジャンヌ・アルトマイヤー（ソプラノ）
フリッカ（ヴォータンの妻、結婚の女神）／ブリギッテ・ファスベンダー（メゾソプラノ）
アルベリヒ（ニーベルング族の小人）／ゾルタン・ケレメン（バリトン）
ローゲ（火の神、半神、ヴォータンの側近）／ペーター・シュライアー（テノール）
ヴォータン（神々の長）／トーマス・スチュアート（バリトン）
ミーメ（ニーベルング族の小人、アルベリヒの弟）／ゲルハルト・シュトルツェ（テノール）
ファアゾルト（巨人族）（演技）／ゲルト・ニーンシュテット
ファアゾルト（巨人族）（歌唱）／カール・リッターブッシュ（バス）
ファフナー（巨人族、ファアゾルトの弟）／ルイ・ヘンドリクス（バス）
フロア（幸福の神）／ヘルミン・エッサー（テノール）
1978年・シネオペラ・146分
主催／東京テアトル

<『指輪』4部作の第1作をはじめて>

オペラファンそしてリヒャルト・ワーグナーの楽劇ファンには、パイロイト音楽祭で4夜連続で上映される『ニーベルングの指輪』4部作の鑑賞は最大の夢。1813年生まれ

のワーグナーの信奉者であり全面的支援者となったのがバイエルン王ルートヴィヒ2世だが、ワーグナーと彼にまつわるお話は、再三特集されたテレビ番組で私は何度も観た記憶がある。

また、ワーグナーの勇壮かつ壮大な曲想はヒトラーはもとよりフランシス・フォード・コッポラ監督にも好まれたため、『ワルキューレの騎行』が『地獄の黙示録』（79年）に使われていることはご承知のとおりだ。

『ラインの黄金』は『ヴァルキューレ』『ジークフリート』『神々の黄昏』と続く『ニーベルングの指輪』4部作の第1作で、上演時間は最も短い、それでも2時間26分。したがって、1974年の弁護士登録以降、本業に忙しかった私はまともに鑑賞したことがなかったが、今回テアトル梅田で開催された『カラヤン フィルム・コンサート』ではじめて鑑賞することに。

第1場のライン川の河底で戯れるラインの乙女たちの姿に入る前の序奏は有名。次第に高揚していく弦楽器と金管の音に気持ちが次第に盛り上がる中、目は必然的にスクリーンに集中していくことに。

<「指輪」は誰の手に>

『ニーベルングの指輪』4部作と呼ばれる黄金の指輪を最初に作りこれを手に入れるのは、ニーベルング族のアルベリヒ（ゾルタン・ケレメン）。

スクリーン上にはライン川の河底が映し出され、その中をラインの乙女たちが軽やかに泳いでいく。地底のアルベリヒは順番に3人の乙女たちに言い寄るが、ごとごと袖にされておかんむり。しかしここで乙女たちから「愛を断念する者だけが地底に眠る黄金を手にし、無限の権力を得て世界を支配する指輪を造ることができる」と聞いたアルベリヒが、「我こそが！」と愛を断念し黄金を奪うのが物語の発端だ。なるほど、なるほど・・・。

<天上では、「請負契約」をめぐる紛争が！>

全1幕4場からなる『ラインの黄金』の第1場の舞台はライン川の河底だったが、第2場はうってかわって天上。つまり、ここは神々が住む最も環境の良い空間だ。ここでまとめて登場人物を紹介しておく、神々のボスがヴォータン（トーマス・スチュアート）でその妻がフリッカ（ブリギッテ・ファスベンダー）。そしてヴォータンの側近がローゲ（ペーター・シュライアー）で、フリッカの妹がフライア（ジャンヌ・アルトマイヤー）。

他方、ヴォータンとの契約でライン河畔の山上の居城建設を請け負ったのが、巨人族の兄弟ファアゾルト（ゲルト・ニーンシュテット）とファフナー（ルイ・ヘンドリクス）。そんな天上では今、ヴォータンとファアゾルト、ファフナー兄弟との間で債務不履行をめぐる紛争が発生していた。

それは、請負契約の報酬としてヴォータンが女神フライアを兄弟に与えると約束していたのに、最初からその気がなかったらしいこと。しかも、ヴォータンはその処理を契約締結を勧めた智者のローゲに任せようとしたから、ローゲは困惑気味。

<指輪をめぐる新たな紛争に！>

そんな中でローゲが明らかにしたのが、アルベリヒがラインの黄金を奪って指輪を造り、地底のニーベルング族の王として支配しているという話。

ニーベルング族と確執のある巨人族のファアゾルトとファフナーがその話に興味を示したのは当然。その結果、フライアの代わりにその黄金と指輪を報酬としてよこせ、と言いはじめたが、意外にも同じように興味を示したのがヴォータン。つまり、ヴォータンも世界を支配することができる指輪を自分のものにしたいと望んだわけだ。もちろん、この指輪はラインの乙女たちが取り戻してほしいと願っているものだから、仮にアルベリヒから取り上げたとしても、本来乙女たちに返還すべきもの。しかし、欲の皮の突っ張った巨人族の2人と神々のボス、ヴォータンのあくなき欲望によって、請負契約の不履行をめぐる紛争は、指輪をめぐる新たな紛争に発展することに。

<実力行使では紛争は解決しないのに・・・>

イスラエルによるハマスが実行支配するガザ地区への軍事行動は現在泥沼化しているが、実力行使で紛争が解決しないことは明らか。

ところが、指輪をめぐるヴォータンと対立した巨人族の兄弟は、指輪を持ってくるまでフライアの身柄を預かると宣言して、フライアを連れ去るという実力行使を強行。つまり、神々の時代にも「人質」という概念が存在していたわけだ。

そこで、やむなくヴォータンはアルベリヒから指輪を取り上げるためにローゲを連れて地底のニーベルハイムに降りて行ったが、そこでみせるヴォータンの計略とは？

<やっぱり頭を使わなければ>

第3場ではまず、指輪の力によって弟のミーメ（ゲルハルト・シュトルツェ）たちを隷属させ、地底で権勢をふるうアルベリヒの姿が映し出される。アルベリヒの権力の源泉は、指輪の力によって隠れ頭巾を使って透明人間になったり、大蛇になったりと自由に変身できること。そんなアルベリヒの力にヴォータンは最初は驚いたが、そこでヴォータンが立てた計略とは？

それは、何にでも変身できるのならカエルに変身してみせろ、とひっかけ注文を出した。ヴォータンの計略にまんまと引っかかりカエルに変身したアルベリヒを捕らえるのは、ヴォータンとローゲにとって容易なこと。しかし、アルベリヒはだまされたとホゾをかんだが、既に遅い。やはり頭を使わなければ・・・。

ヴォータンは縛り上げたアルベリヒを連れて、再び天上へ。さあ、天上に戻ったヴォータンはこれからアルベリヒに対してどんな処置を？さらにその後、巨人族の兄弟とどんな交渉を・・・？

<神話の時代も階級社会>

こんな1場から3場までのストーリー展開をみて痛感するのは、古代から中世にかけてのヨーロッパ社会は階級社会だったが、神話の時代もそうだったということ。

08年12月26日に観たモーツァルトの『フィガロの結婚』の評論でも、階級社会と身分差別のことを書いたが、『ラインの黄金』でも天上に住む神々の世界と巨人族、そして巨人族が確執をもつ地底のニーベルング族、さらに美しいけれども泳ぐことしかできないラインの乙女など、その階級社会と身分差別は歴然としている。また神々の世界における序列も明確で、男女差別はもとより、ローゲは意見具申ができるだけで決定権はヴォータン1人が握っていることは明らかだ。

ルードヴィヒ2世がワーグナーをこよなく愛し庇護したことは有名だし、ヒトラーがワーグナー音楽に陶酔したことも有名だが、ひょっとして2人ともワーグナーの楽劇がこんな風に階級社会と身分差別が明確にされていることに共鳴し安心感を覚えたのかも・・・。

<ヴォータンのアルベリヒに対する仕打ちは強欲すぎ・・・？>

黄金を奪い指輪を手にしたニーベルング族のアルベリヒはたしかに強欲で権力的だが、それは愛を断念するという大きな犠牲を払って獲得したものだ。それに対してヴォータンは、何の犠牲も払わず計略だけでアルベリヒを縛り上げたうえ、身柄解放の身代金として地底にある黄金や魔法の隠れ頭巾、そして指輪まですべてよこせと要求したから、かなり強欲・・・。

結局アルベリヒは身ぐるみはがされた状態でやっと解放されたわけだが、そんなアルベリヒができる唯一の反撃は、指輪に死の呪いをかけること。しかし、今や得意の絶頂にあるヴォータンはそんなことは全然気にせず、いよいよ2人の巨人族との交渉に臨むことに。

<指輪をめぐる騒動の顛末は？>

その後に展開される巨人族兄弟とヴォータンとの交渉をみると、兄弟の方が交渉上手。というより、フライアという人質を握っている分だけ兄弟の方が立場が強いようだ。その結果、ヴォータンはアルベリヒから巻き上げた黄金、隠れ頭巾、指輪の三点セットをそっくりそのまま兄弟にとられてしまうことに。

もっとも、指輪の交付には最後まで抵抗し逡巡したヴォータンだったが、その後押しをしたのは第4場で岩場の裂け目から少しだけ登場するエルダ。エルダはアルベリヒの呪いがかかっている指輪を手放すようヴォータンにアドバイスし、世界の終末が迫っていると警告したわけだ。そんな後押しもあってヴォータンはしぶしぶ指輪を兄弟に交付したわけだが、その直後にみられる黄金の分配をめぐる兄弟の血みどろの抗争をみれば、なるほどこれが指輪の呪いかと納得できるはず。つまり、兄ファアゾルトが弟ファフナーをこん棒で殴り殺してしまう結果になったわけだ。

指輪をめぐる騒動はこんな悲劇的な結末となったが、フライアが無事に戻ってきたヴォータンたち神々の世界は元どおり安泰。結局ヴォータンは巨人族兄弟に請負代金を支払わないまま、完成したヴァルハラ城への入城が始まることになったわけだ。

<ラストも壮大な管と弦の響きの中で>

ワーグナーは自分のオペラが「楽劇」と呼ばれることに抵抗はしたが、ワーグナーのオペラの特徴は何よりも楽器編成の大きさ。とりわけ、金管楽器の規模が大きくなっている。彼の音楽が壮大で勇壮なのはそのためだ。『ラインの黄金』では序奏ですぐにそんな彼の音楽の特徴がわかるが、ストーリー展開の中では登場人物たち1人1人が歌うアリアがメイン。ベートーベンの交響曲第9番は合唱付きで有名だが、交響曲の中にこんな大規模な合唱を入れたのはベートーベンがはじめて。逆に『ラインの黄金』ではアリアや二重唱、三重唱ばかりで合唱がないのが特徴。

そんなワーグナーのオペラ『ラインの黄金』のラストは『ヴァルハラ城への神々の入城』。これは虹の橋の上をヴォータンたち神々が入城していくもので、まさにこれぞワーグナー音楽の極致ともいえるべき勇壮かつ壮大な音楽だ。

神々たちの権謀術策がうずまいた面白いストーリーはこれにて一件着落となるわけだが、これはあくまで指輪4部作の第1部。機会があれば、2部以降の展開もじっくり鑑賞したいが、そんなチャンスはさていつめぐってくるだろうか・・・。